

## 事業報告

令和3年度 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」オリエンテーション合宿 in 国立磐梯青少年交流の家  
「福島の復興・創生、その先に…～明るい未来をOutput～」



令和3年7月22日(木)～7月24日(土)  
【参加者】福島県内高等学校1年生～3年生  
【場所】旅館「亀屋」(松川浦ガイドの会)  
東日本大震災・原子力災害伝承館 他

### 事業趣旨

- ・高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、課題発見・問題解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材育成に資する。
- ・高校生がそれぞれ取り組む実践活動の成果や自身の成長を評価し、青少年の体験活動に関する社会的な認知を高める。

### 参加者内訳

	高校1年生	高校2年生	高校3年生	合計
男	0	4	0	4
女	1	1	1	3

### 活動日程

	午前	午後
7/22 (木)	・ジャンボタクシー福島駅発、郡山駅発 ・開会式(福島いこいの村なみえ) ・講話(HAMADOORI13) ・フィールドワーク(松川浦ガイドの会)	・フィールドワーク(東日本大震災・原子力災害伝承館) ・地域理解と地域探究の把握 ・地域課題に関するフィールドワークの進め方 ※宿泊先【福島いこいの村なみえ】
7/23 (金)	・コース別フィールドワーク ○食べてもらう(海産物・製麺) ○来てもらう(観光協会・旅館) ○知ってもらう(太陽光/水素発電・体育施設)	・国立磐梯青少年交流の家へ移動 ・グループ別の地域課題の探究 ・グループ発表 ※宿泊先【国立磐梯青少年交流の家】
7/24 (土)	・個人テーマの設定と進め方 ・個人テーマの発表	・実践活動に向けてのガイダンス ・閉会式 猪苗代駅へ送迎



### 研修トピックス

#### <参加者から見た浜通りの復興・創生の理解と地域探究の学び>

参加者は、「HAMADOORI13」の方々震災直後の話を聞き、浜焼きを復活させた松川浦ガイドの会代表の方との対話の中で復興・創生に対する思いや熱意を感じ取り、福島県浜通り地区の復興に向けて挑戦し続ける福島の人々の姿勢が、地域づくりや地域の問題を解決する力となっていると実感できた。「地域理解と地域探究の把握」の時間では「帰ってきたときに少しでも笑顔になれるように」「小さな運動が少しずつ広がっていった」「自分の目標を見つけることが大事」等、キーワードや地域を活性化させるための手掛かりとなった言葉を付箋に書いてホワイトボードに掲示していった。そしてボードに貼った付箋を見て、皆が同じ思いを感じたり、自分では感じられなかった考えを見て共感したりする姿が見られた。また、「東日本大震災・原子力災害伝承館」の見学や浪江町内を見て感じ取った思いを同様に付箋に書き、グループ化することで浜通り地区の現在を見つめ直した。参加者は地震の被害の様子を知ったことよりも、「故郷に帰れない人」「関連死が多い」「原子力災害以外の大地震によるデメリットに目を向ける必要性」と浜通りの抱えている課題に目を向ける意見が多く、地域の復興や創生に向けて、様々な課題が山積みし、復興・創生への取り組みに労力を要する現実に直面した。一方で参加者たちにとっては地域と自己を見つめ直す機会になり、「考えることよりも、まず行動を起こすこと、踏み出すこと」の大切さを感じ取る者もいた。

#### <地域課題の探究、3つのコースでの学び>

観光コースでは、参加者が見学した観光協会の語り部さんから温泉街の復興の取り組みについて聞いたことを基に、利用者数の減少をグラフ化した上で、観光客の回復のためには、浜通りの現状を知った人々自らが語り部となることが風評払拭の一つの策ではないかと考えを発表した。新産業コースでは、見学してきた震災によって新たに生み出された水素エネルギー研究や運用が進んでいるソーラー発電、Jヴィレッジでの取り組みから、新たな可能性のある産業が福島から生まれていること、スポーツ施設の迎ってきた姿を隠さずに発信していくことが「知ってもらう」ことに繋がり、復興のシンボルになるのではないかと発表した。食文化コースでは、海産物の現状を伝えたり、おいしい焼きそばの作り方を写真で見せたりして、福島県の食べ物が目に触れる場面を増やしていくことが大切であるとし、食べてもらうことが良さを広める活動のきっかけになると発表した。

### 成果と課題

#### <成果：○、課題：▲>

- 参加者は地域の復興・創生に携わっている方々の取り組みから、地元を大切にしたい気持ち、地域に目を向けさせるための取り組みを目にすることができた。東日本大震災・原子力災害伝承館の見学では震災後、復興には様々な課題が山積みしていることが分かり、復興・創生への取り組みに労力を要する現実に直面した。参加者は、まず行動を起こす必要性を強く感じていた。
- 参加者は各コースのフィールドワークにおいて、各施設の復興・創生に携わっている方々の言葉を聞き、課題に対する解決の方策を得ることができた。各コースで学んだことを、数値的なグラフや写真を効果的に使って発表することができた。今回の合宿で、味わたり体験したりすることが人の気持ちを動かすことを知り、その学びを生かし、フィールドワークで学んだ水素エネルギーの有用性を福島県内に広める活動、福島県産の農作物の消費拡大の取り組みなど、自分の住む地域活性化計画の立案につながった。テーマと計画を発表したそれぞれの参加者は、夏休み中の実践活動に向けて意欲を高めることができた。
- ▲ 福島県内では、新型コロナウィルスの感染拡大が依然として予断を許さない現状である。オリエンテーション合宿に参加した参加者は、この状況下においても、電話や手紙で情報等やり取りするなど工夫しながら地域活性化計画を進めようとしている。しかし、外出自粛や感染リスクの高い活動の禁止等を余儀なくされてしまい、対面での大人数の集会や講演会の開催が難しく、集会や講演会を用いた情報発信が難しいことから、情報発信の方法に課題が残った。